

対談を終えて 対談から見えてきた立教型教養教育

上田 信

対談を終えて

立花・庄司両氏との対談は、絶好のタイミングで行われた。それは、全学共通カリキュラム（全カリ）は2010年度の改訂にむけて、基本的な方針を策定する時期にあたっていたからである。

対談のなかで、庄司先生が発言されているように、1991年の大学設置基準の大綱化にもなっていて、それまでの大学1・2年次で一般教育を教えるという枠組みがなくなり、本学ではそれまで教養教育を担ってきた一般教育部が解体された。その後、本学では多大の努力を積み重ねて、当時、あまり類例のない全カリという仕組みを作り上げてきた。10年にわたるその歴史を顧みると、かつて一般教育部に所属していた教員の熱意が、全カリを支えてきたことが分かる。しかし、10年という年月は重い。この間に退職された教員も多く、また、2008年度には、全カリの一半である言語教育を担ってきた先生方が、異文化コミュニケーション学部にも所属するようになり、また、全カリにおけるスポーツや音楽・美術などの科目を主に担ってこられた先生方も、それぞれ学部教員の枠に移行する。このことは、全カリは、それまで有形・無形の滋養となっていた一般教育部の資産に、もはや頼ることができなくなった、ということの意味している。鮭の稚魚が卵から孵ってからしばらくのあいだは、その卵から引き継いだ栄養で生きていた。やがてその滋養もとぎれ、いよいよ自分の力だけで生きてゆかな

ければならない時期を迎える。そのようなタイミングのときに、この対談が行われた。

立花氏と庄司氏には本学の特任教員として、全カリの授業「大学と現代社会<「大学」の意味を考える>」を今年度、担当していただいた。対談は、この授業を軸に展開する。この科目は、総合科目A「社会への視点」に位置づけられる立教科目「大学」の科目である。後期木曜日の第5時限に開講され、履修者は100名あまりであった。シラバスには、「大学の歴史的意味と現代的意味、個人史における大学時代の意味、大学に対する社会の期待、大学と現実社会のズレ、などを学生とともに考えていく。最終的には、大学をもっとよくするために、何をどうすることが可能なのかを探る」とあり、授業計画の(5)として、「教養教育のコンテンツはいかにあるべきか。メニューと履修制度を考える」と掲げられている。

また、対談に先立ち、司会として、この授業でテキストに指定されている立花氏の『東大生はバカになったか—知的亡国論+現代教養論』（文春文庫、2004年）を、付箋を要所・要所に貼りながら、熟読した。対談のなかでは十分に紹介するゆとりはなかったが、この著作から学ぶことも、少なくなかった。

大学の外と内

大学で教員を長くやっていると、視野狭窄に陥りがちである。立花氏の大

学論を読み、そして聴いていると、大学の外からの視点を気づかされる。大学の外には、ひろい社会がある、という、ごくあたりまえの事柄を、見落としていたことにハッとさせられる。

ひとつの「あたりまえ」は、学生は通常、4年たてば社会に出て行く、ということであった。大学でカリキュラムについて議論していると、学生にとっては人生の一部分にすぎない4年間しか見ておらず、その限られた時間のなかで、さらに段階を区切って教育しようと考えてしまう。立花氏の議論では、社会に出てから自分で学び、考える力をつけることが、大学の役割だと明言されている。対談のなかの「(大学で)何かの能力を身につけなければならないとすれば、それは、……要するに、学ぶ力だと。大学を離れて、教師の手を離れたその人間が、その後、どんな新しい課題にぶつかっても、自分で学んで、それを切り抜けていく。そのベーシックな基礎能力が一番大事だ」という立花氏の発言、あるいは、著作のなかの「自己学習能力というのは、問題意識をもって世界を見、問題を発見し、自分でそれを問題として定式化し、自分にそれを課題として与え、自分で其の解決方法を考え、解決できるまで自分をスーパーバイズするという全プロセスを含む」という記述、それらから私が学んだことは大きかった。

カリキュラムに1年次から4年次までの段階を設け、それぞれの段階、たとえば入門→基礎→発展→応用などの段階、それぞれに対応する課題を設定し、学生がそれぞれの課題を達成すればよし、達成しなければ「不可」を与えるという大学の常識を、問い返してみる必要があるようだ。一定の知識や技能の習得が目指される学部教育の場合には、こうしたカリキュラム編成は、必要であろう。しかし、全カリが目指

す教養教育の場合、年次進行を考えず、大学の4年間をひっくるめて、学生自身の人生の一つのステップと位置づけ、4年間をかけて「自己学習能力」を高めるという発想は、検討に値する。教養は、人生のなかで、いつ身につけてもよいのであるから。

大学において学生が身につけるべき能力とは、社会に豊富に存在する情報を使いこなす力だと、立花氏は指摘する。端的に「ユビキタス大学」という表現となっている。本学の学生が無料ないし割引で入館できる博物館がある、ということが紹介されている。教員には知られていない。利用可能施設や特典については、本学の学生部のホームページから、「学生サポート」→「その他のサポート」に入ってゆけば、一覧として示されている。

百学連環

全カリの総合科目は、現在、年次指定を行っていない。しかし、だからといって学生が4年間にわたって目的意識をもって、教養を身につけるべく履修しているか、というと、話はまったく別である。

全カリ部長経験者でもある庄司氏は、全カリの履修計画を立てることが、学生にとっていかに難しいかを、具体的に述べている。特に総合科目の場合、庄司氏が「シラバスを見ると、もうこの贅沢さというか、これを一日じゅう読んでいてもあきないくらいおもしろい」といほどの科目を展開しているものの、学生の履修行動をみると、1・2年次に学部科目や言語科目で埋まっている時間にたまたま開講されていて、しかも、成績評価が厳しくなさそうだと、と思われるものを、機械的に選んでいる、といったパターンが多く見受けられる。たまたま選んだ科目で、

刺激を受けてものの見方が変わった、という学生の話も聞くのではあるが、主体性のとぼしい履修は、ときとして授業中の私語や携帯メールといった状況を招いている。

現在もっとも欠けている点は、学生にカリキュラムの体系を伝える、ということであろう。分厚い『全学共通カリキュラム授業内容』の冊子を、最初から最後まで読み通したうえで、履修すべき科目を選ばせることは、不可能である。では、どうすればよいのか。立花氏は著書のなかで、「教養の基本が現代社会の知の世界の概略をつかむことにあるのなら、まず、……知の世界の全体像を示すマップを手に入れる……ことが必要」だと述べている。

対談のなかで、博物館めぐりを学生にさせる、その最初が印刷博物館であった、という話の流れのなかで、なんの説明もなく西周の百学連環という話題が飛び出している。補足すると、日本で最初に学問の体系的な見取り図を描いた西周は、西洋学術への素養に基づき、その百科全書的な試みを「百学連環」という著作にまとめている。本学にも縁が深いことに、この『百学連環』を研究した歴史学者は、1958年から65年まで文学部の専任教員であった大久保利兼氏であったという。百学連環表目には、第一編・普遍学の第一「歴史論」に始まり、第二編・殊別学の第四に理工学な諸学を配置する学問の体系が示されている。百学連環の表を参考にしながら、本学の全カリ科目のみならず、学部教育科目のすべてを、関連づけながら体系的な見取り図を作成することも、必要な作業だと言えよう。

本来、新入生に対するガイダンスは、こうした知の世界の全体像を示すべき場なのであるが、現状は、履修に必要な手続きの説明に大半の時間を費やさざるを得ない。総合科目を検討する場

において、新入生に「百学連環」的なものを説明するガイダンスを実施してみても、と提案したのではあるが、他のメンバーからは「学生はどうせ聴いてはいないでしょう」という、いまの学内をみれば当然の意見が出て、話題にも取り上げられなかった。私が対談の後半で、「立花さんが全カリ部長になったら」という、とってつけたような質問をしているのも、実は藁にもすがりたい（とっては立花氏に失礼だが）気持ちからの発言であったのである。立花氏は著書のなかで、「もし私が教養学部長なら、大学新入生全員を集めて、入学後の最初の一ヶ月間に……集中講義を行い、その間に、『同時代の知の基本的枠組』の全体像の概略を与えてしまいたいと考えるでしょう」と述べている。この発想で本学に可能な処方箋はないものか、というのが質問の意図であった。しかし、立花氏の返答は、要は「自分で考えなさい」ということであったのか、といま受け止めている。

立教型教養教育

この間、この対談をはさんで、全カリのグランド・デザインを構想する作業の渦の中に巻き込まれ、教養教育・リベラルアーツ・学士課程教育・初年次教育などと、さまざまな事柄を学んできた。リベラルアーツと教養教育とは、イコールではないこと、専門教育と教養教育とが対になる概念ではないということ、また、リベラルアーツが対置されるものは職業教育であること、といった基礎の基礎から学んでいる段階であった。また、たまたま国際基督教大学に非常勤講師で出かけることがあり、その少人数教育を軸にするリベラルアーツは、本学においては実施不可能であることも痛感した。なかばマ

ンモス大学化し、学部が10も併存する大学で、どのような教養教育が可能なのだろうか。それやこれやと悩んでいた時期であっただけに、この対談の最後の私の発言が、自然に飛び出たのである。

うえだ まこと（本学文学部教授
全学共通カリキュラム運営センター
総合教育科目担当部長）